

歌謡モルナに見られるカーボ・ヴェルデ人の文化的アイデンティティ

——バルラヴェント諸島におけるモルナのクレオール化からの視点

平成 25 年編入学

派遣先国：カーボ・ヴェルデ共和国

青木 敬

キーワード：モルナ，クレオール化，心性，混雑文化，文化的アイデンティティ

対象とする問題の概要

カーボ・ヴェルデは 1975 年ポルトガルから独立し、現在カーボ・ヴェルデ人は自らのアイデンティティの確立を、クレオール（化）という文化の混雑現象を通じて追求している。カーボ・ヴェルデは島により言語・文化がかなり異なるが、歌謡モルナはどの島においても、島民が最も価値をおくものである。モルナに込められた意味は奥深く、16 世紀から現在までに至る島民の心情や生き様を表現し、独自のアイデンティティは「カーボ・ヴェルデ性」という言葉で表されている。

カーボ・ヴェルデ性を特徴づけるモルナは大きく二種類に分けられる。一つは 19 世紀から演奏されてきた伝統モルナであり、もう一つは電子機器の普及によって新たな音や楽器を導入した現代モルナである。今日、若者の伝統モルナに対する興味が薄れており、現代モルナを演奏する音楽家が増加している傾向にある。伝統モルナと現代モルナの均衡及び発展が音楽家の関心事である。

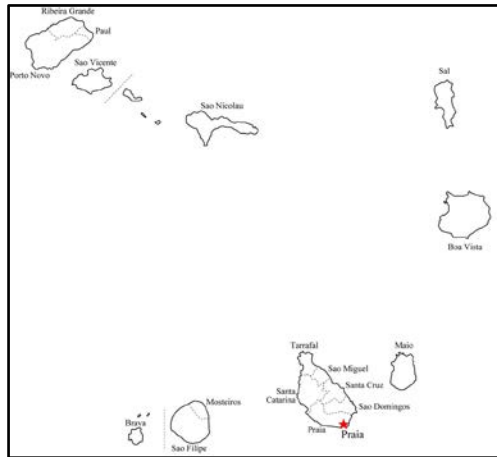


図 1 カーボ・ヴェルデ共和国

研究目的

本研究の目的は、ポルトガル語系クレオール文化の特徴を濃厚にもつサン・ヴィセンテ島民、サント・アンタウン島民、サン・ニコラウ島民の複合的なアイデンティティを歌謡モルナの側面から明らかにすることにある。その研究方法は二つに大別される。一つはモルナにおける歌詞分析であり、もう一つはその構造の分析である。

本研究では、音楽構造の側面から接近する。具体的には、いかに民衆が歌謡モルナを音楽的に嗜好し、

文化としてのモルナに帰属意識をもっているかを実地調査する。また、現代のモルナに用いられる楽器の種類、演奏様式、リズム、メロディー等が何故、どのように変容したかを明らかにし、実際にどのような生活場面で演奏されているか（家庭、学校、路上、ホール、労働、余暇、祝祭、儀式等）を調査する。さらに、文献調査とインタビュー調査を通じて、モルナのもつ価値を社会と文化全体（風土、言語、日常生活）に位置づける。

フィールド・ワークから得られた知見について

伝統モルナと現代モルナは島によって異なる価値を有していた。すなわち、都市化しているサン・ヴィセンテ島ではあらゆる文化を吸収しているが故に、「現代モルナ」がより際立ち、伝統を維持していたサント・アンタウン島及びサン・ニコラウ島では「伝統モルナ」に価値が置かれていた。このような文化的相違があるにも関わらず、三島において一貫して見られた帰属意識はモルナに強調されている情緒ソダーデと密接に結びついている。ソダーデという情緒は、カーボ・ヴェルデ人が移住する際に奏でるモルナの音楽と歌詞に最もよく表れているといえる。



写真1 現代モルナ



写真2 伝統モルナ

また、モルナの歌詞に現れる三つの中心概念—ソダーデ、クレチュウ、モラベザーが民衆の日常生活においてどのように解釈されているかを調査した結果、サン・ヴィセンテ島は他の二島とは異なり、都市化の進行によって中心概念の本質を失い始めていたことが分かった。

モルナのクレオール化には、ジャズ、ファド、ボサ・ノヴァ等の外的要因およびカーボ・ヴェルデ南部の伝統音楽フナナの内的要因が関係していた。モルナが演奏される場所は一般家庭、酒場、道、本屋、ホテル、レストランである。楽器は基本的にヴィオラウン（ギター）、カヴァキーニョ、ベース、ドラム、電子ピアノが用いられ、他にはラベッカ（ヴァイオリン）、トランペット、クラリネット、サクソフォーン、マラカス等であり、南米諸国、アメリカ、ポルトガルの音楽をモルナに混淆させているといえる。

祭事は非常に多く、様々なモルナの変種が見られた。都市で開催される音楽祭で歌われるモルナは、「モルナ・フュージョン」がしばしば演奏され、反対に伝統保守的な島では「モルナ・コラデイラ」（または「ガロップ」）が目立った。葬式では悲哀をより表現させる「モルナ・スロー」が歌われ、今回の調査では三種類のモルナを確認した。

今後の展開・反省

今回の現地調査でバルラヴェント諸島におけるモルナの変種を把握し、モルナに関するデータ収集を

行った。今後はそれらのデータに基づいてモルナの定義および分類を行う。また、クレオールという概念が地域や国（あるいは世代）によって異なるために、島民が現在のカーボ・ヴェルデにおける概念としてのクレオールをどのように認識しているかについて考察する。そして、モルナのクレオール化の構造を今回の調査で得た資料を用いて分析し、バルラヴェント諸島における島民の帰属意識にどのような一貫性が見られるかを明らかにする。

今回は三島を調査したが、実際には三島の中でもとりわけ港湾地域を中心に調査したため、次回の調査はより内陸に焦点をあて、全ての村を調査の対象にしたいと考えている。



写真3 サン・ヴィセンテ島ミンデーロ市



写真4 サント・アンタウン島フォンタイーニャス村